パブリック・サービス研究分科会

講義年月日　　2008 年 7 月 14 日　　午後 1 時 00 分 ～ 2 時 30 分

講演者　　加藤好郎氏（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス事務長）

テーマ　　機関リポジトリ（Institutional　Repository）と大学図書館

講義内容

１．機関リポジトリとは

レイム・クローの定義：単独あるいは複数の大学コミュニティーの知的生産物をとりまとめて保存するデジタル・コレクション

クリフォード・リンチの定義：大学とその構成員が創り出したデジタル資料の管理や発信を行なうために、大学がコミュニティーの構成員に提供する一連のサービス

２．機関リポジトリの概念と設置目的

①大学の研究成果のショーケース（教育・研究活動の説明責任の履行、大学の知名度の向上）

②電子情報の長期保存（機関による組織的な保存とアクセスの保証）

③学術コミュニケーションの変革（学術出版に替わる新たなシステムの可能性）

＊研究者は、学位論文、各種レポートなどを機関リポジトリに登録する。

３．学術コミュニケーション

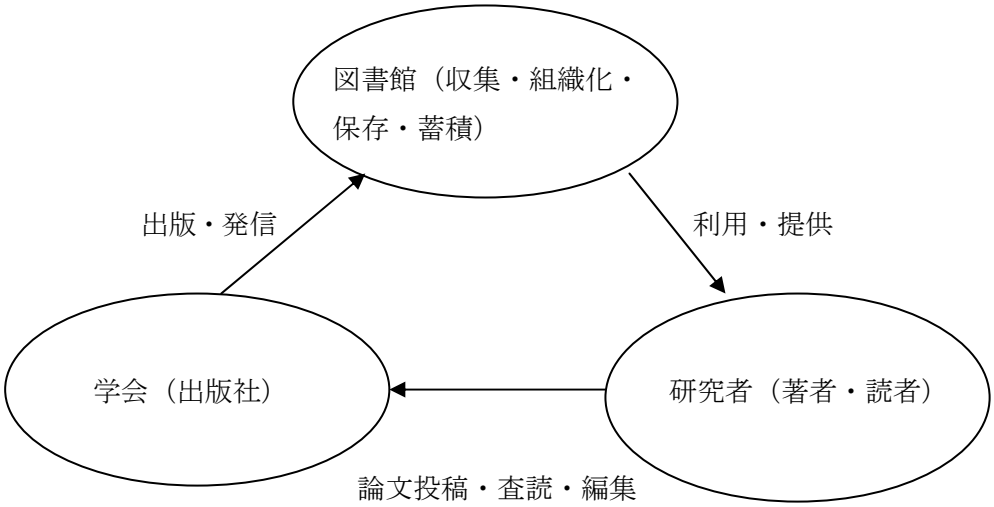
学術コミュニケーション⇒大学教員・研究者・独立した研究者達の研究や学術的活動が創造・評価・変換される公式または非公式のプロセスのこと

・日本最古といわれている雑誌　→　「西洋雑誌」1867 年（慶応 3 年）

・日本の学会誌のさきがけとなった雑誌　→　「明六雑誌」1874 年（明治 7 年）

・学術雑誌の機能（登録・品質保証・報知・保存）

・　Circle of gifts（贈与の円環）



４．雑誌の高騰化

・国内大学図書館の外国雑誌受入誌数の低下

（1989 年：38,000 タイトル　→　2001 年：21,000 タイトルにまで減）

⇒研究者(読み手)のアクセス障害、研究者(書き手)のリサーチ・インパクトの低下

⇒大学図書館への影響(購読タイトルの減少・研究支援機能の低下・大学における存在感の希薄化)

・研究者の対応　①著作権譲渡に対する抗議行動

②編集委員の反発と対抗誌創刊の動き

③ボイコット運動（←失敗）

５．ＳＰＡＲＣ運動（ＡＲＬ）

学術出版市場における競争の創出

①商業出版社が刊行する高額雑誌と競合するタイトル雑誌の創刊支援

②大学図書館による購読義務(ＡＲＬに加盟している雑誌を買うことで、支える)

６．オープンアクセス

・学術論文への障壁なきアクセス(完全または部分的、刊行後一定期間後のオープンアクセス)

・ＯＡ誌の出版コストをいかに回収するか？（著者に課金、補助金・広告収入からの収入等）

・セルフアーカイビング(著者がプレプリント、ポストプリントを個人サーバー或いは大学が運営するサーバーに蓄積し、無料で公開する)

↓

登録の義務化や図書館員の代理登録によるセルフアーカイビングの促進

＊ただし、あまりオープンになると財政的にうまくいかなくなり、品質管理と査読プロセスが崩壊する可能性がある（＝学会にとっての脅威 → 共生関係が必要）

７．出版社版と著者版の相違

出版社版：出版社のＥＪサイトに掲載された正式な電子論文ファイル

著者版　：著者の手元にある査読後の原稿

＊著者最終稿を機関リポジトリへ登録(出版社が出版する学術雑誌より早く情報入手が可能)

８．ＯＡＩ－ＰＭＨフレームワークの構成者

①データプロバイダー

②サービスプロバイダー

③ＯＡＩの３層モデル（サービス層・プロトコル層・データ層）

９．さいごに

機関リポジトリの意義

［研究者にとって］・アクセス環境の改善（読み手にとって）

・インパクトの向上（書き手にとって）

［大学図書館にとって］・研究支援の強化に繋がる
・大学における図書館の価値の向上

◎慶應義塾図書館（メディアセンター）はどうする？
↓

・ＮＩＩから 19 大学に補助金（慶應・早稲田には 500 万円）
・リポジトリのオープンリソース : 250 万円程度でシステムは立ち上がる（←高くはない）
・塾内での調整（ITC、DMC、メディアセンターとの調整）⇔ 学部教員への説明・理解
・「The best is the enemy of the good」=「やれるところからやる」

以　上